

Title	楽しいことを見つけて研究にも遊びにも全力投球で臨む：満倉靖恵准教授に聞く
Sub Title	
Author	田井中, 麻都佳(Tainaka, Madoka)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2012
Jtitle	新版 窮理図解 No.11 (2012. 9) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000011-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



楽しいことを見つけて 研究にも遊びにも 全力投球で臨む

信号処理技術をベースに画期的なシステムの開発に取り組む満倉さん。ショートスリーパーで、研究も遊びも決して手を抜かない満倉さんのエネルギーの源は、楽しいことを見つけて、とことん追求するという前向きな姿勢にあるようだ。

—ご出身は奈良県ですが、その後、松江に移られて、理系の高校に進学されたんですね？

はい。これまで転々として来ましたが、ようやく安住の地を見つけました。理系に進んだのは、父が理系で、母が医療系という家庭に育った影響でしょうか。家の本棚には絵本ではなく、数学や物理の本、医学書などが並んでいました。休日にこれらの本をずっと読んでいる勉強熱心な父の姿が心に焼き付いています。今でも記憶に残っているのは、ガラスでできたものを落として割ったとき。父が「なぜ割れるか」を、子どもの私相手に延々と語り、その話が面白かったので、興味から他のいろいろな物も壊して、母に叱られていました。その流れで高校も理系を選択し、大学では電気電子系を専攻しました。

その後、さまざまな所へ移動してきました。修士までは岡山県立大学で、博士を取ったのが徳島大学です。そして、東京大学大学院医学系研究科で学び、岡山大学、東京農工大学などを経て、2011年に慶應義塾大学に移りました。

—研究者になろうと思ったのはいつ頃ですか？

大学4年生のときに、通信関連の国際学会に参加する機会があり、そこでベストペーパー賞とベストプレゼンテーション賞をダブル受賞したときです。このときの研究で、今考えれば大した問題ではないのですが、当時はたいへん大きな壁を感じていて、何日も徹夜することに。でも、受賞して苦しかったことがすべて吹っ飛び、大きな喜びに変わったことが心に残っています。そして、何か問題にぶつかったとき、それを解決するために必要となる努力と根性は、ここで教えられました。

その後、研究者としての転機となったのが、徳島大学時代の赤松則男先生との出会いです。外からうるさく聞こえてくる工事現場の騒音に対して、「この音と逆位相の音を作ってみたら騒音が消えますよね」と先生にお話したところ、当たり前のことなのですが、自分の研究を常に生活で意識していることを褒めてくださいました。そういった姿勢は研究者として成長できる、と太鼓判を押していただき、今に至っています。音や画像を周波数に変換し、定式化するというのをやり続けるなかで、

まわりの種々の現象と周波数が結びつくようになり、音を聴いたり、画像を見るだけで、自然と、そこにどんな周波数成分が含まれているのか見当がつくようになったのです。もうほとんど職業病というか、今や、身の回りの現象はなんでも周波数や式で見えるようになってしまいました。

赤松先生にアドバイスをいただいたことで、以来、脳波の研究に携わるようになりました。当時はもう、夢中で周波数のことばかり考えていましたね。博士課程では顔の画像の周波数解析の研究を行いました。これは、画像を定式化することで、個人を識別するというものです。個人の顔がそれぞれ個別の式で区別できるなんて面白いでしょう？ 結局、1年半でドクター（博士号）を取得しました。

—どんな研究生活だったのですか？

朝8時には研究室へ出て、夜中2時くらいまで研究に没頭するという毎日でした。もともとショートスリーパーで、5時間も寝たら完全に復活するので辛いと思ったことはありません。しかも、赤松先生と一緒に、夕方1時間ほどジョギングをするのが日課でした。おかげで、今もマラソンを続けています。毎年、湘南国際マラソンなど、大きな大会にも出ているんですよ。



よく食べ、よく学び、よく遊び、
よく感動し、よく笑い、たまに泣く…

——パワフルですね。そのエネルギーの源はどこにあるのですか？

そもそも何かを決めるとき、私はすべて「好きか嫌い」で判断しており、好きなことだけをやっているから、ストレスがたまらないだと思います。面白そうだと思ったら、全力でチャレンジする性質で、岡山から上京する際も、まったく不安はありませんでした。

それから、じつは私は一卵性双生児で、弘恵という名の姉がいたのです。その姉を亡くしたことが、私の人生を大きく変えました。以来、姉の分まで、楽しい思いも辛い思いも苦しい思いも、2人以上生きようと心に決めているのです。

だから、研究も精一杯やるけれど、遊ぶときも徹底して遊ぶ。よほど仕事が詰まっていたり出張が入っていたりしない限りは、日曜日は自由の日と決めて、目一杯遊ぶことにしています。

今月も1カ月先まで、休みの日のスケジュールは一杯です(笑)。でも、どんなに遊んでも、疲れは翌日まで引きずらないのが鉄則です。

あとは、美味しい料理をたくさん食べること。もっぱら食べる役専門ですが(笑)。よく食べ、よく学び、よく遊び、よく感動し、よく笑い、たまに泣く……。そんな毎日です。

——でも、それだけ全力投球していたら、くたびれてしまいそうですが……。

走っているのがいいんでしょうね。体力だけは自信があります。日曜日にはできる限り走るようにしていますし、海外出張に行くときも、ランニングシューズを持って行って、走ることで訪れた街を肌で感じるようにしています。走ると、移動の疲れも吹き飛ばしてしまいます。学生たちにも走ろうって声を掛けますし、私と同じように、よく学んで、よく遊びなさいとアドバイスしています。走ったり、仕事を離れて遊ばないと、新しい考えは浮かばないと思うからです。

——慶應義塾大学での研究生活はいかがですか？

慶應はじつに自由で、個性豊かな研究者が多いし、私ものびのびと研究をさせていただいています。学生を大事に育てよう



満倉靖恵 Yasue Mitsukura

生体信号処理、脳波解析、画像処理、画像意味解析、印象解析などをキーワードに、マルチメディア信号処理や生体信号解析に関する研究を行っている。1999年、徳島大学工学部知能情報工学科助手、2002年、岡山大学情報教育コース専任講師、05年、東京農工大学大学院助教授、07年、同大学院准教授となり、11年より慶應義塾大学理工学部准教授。

という環境も素晴らしい。そんな慶應が好きです。これからも信号処理技術を基盤に、自由な発想で、社会に役立つさまざまな研究に精力的に取り組んでいきたいですね。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

●研究に対しては、本当にストイックな方ですが、一方で、僕らの突拍子もないアイデアでも面白がって、「やってみなさいよ」と自由にやらせてくれます。それでいてちゃんとフォローもしてくださる。僕らも先生を見習って、研究にも遊びにも全力投球しています。

(取材・構成 田井中麻都佳)

さらに詳しい内容は
<http://www.st.keio.ac.jp/kyurizukai>